

11月13日、フランスのパリにおいて同時多発テロが発生した。犯行グループは3チームに分かれて襲撃を行い、多くの犠牲者を出した。このニュースを見て、筆者は10年前に同じようにロンドンで発生した事件を思い出した。

当時、筆者はイギリス留学中であり、地元のニュースとして凄惨な現場を目の当たりにした。地下鉄3カ所と2階建てバス1台がほぼ同時刻の自爆テロによって被害を受けたが、地下鉄での爆発の1つは筆者の大学の最寄り駅であり、さら

2つのテロに思う人的交流

ころからわかるように、非常に頑丈に作られていた（爆破されたのは別の会社のもの）。そのバスの2階部分のほとんどが消失したのだから、いかに激しい爆発だったかわかるであろう。その後、イスラム過激派組織のアルカイダが犯行声明を発信したために、イギリス国内ではイスラム教に対する厳しい目が向けられるようになった。

少しづつ通常の生活に戻り始めたある日、（事件を起こしたのは別の国籍の犯人だったにも関わらず）トルコ人の友人からイスラム教を誤解しないでほしいと訴えられた。トルコはイスラム教徒が99%を占める国であるが、その友人によると、イスラム教には「他人を傷つけてはならない」という教えがあり、テロを起こしたのは教えを拡大解釈した、あくまで「過激派」だったそうである。多くのイスラム教徒は危険思想を持っていない、決して悪く思わないでほしいとのことであった。

もちろんテロはいつどこで発生するかわからないものであるから、その言葉だけを信じて、また日本にいるからといって油断しすぎることほできない。ある程度、緊張感を持ち続ける必要があるだろう。しかしながら一方で、過剰な恐れを抱くべきではないというところも考えさせられた彼からの訴えだった。

実際、テロリストには自己陶醉者も多く、人々が恐れ慌てる様子を見たくて事件を起こす者もいるそうである。ロンドンの時も今回も、それぞれの政府がいち早く国民に対して「通常通りに」と呼びかけたのは、そうした背景があったからだろう。「イスラム教」と一括りにして考え危険視することは、そちらの方があまりにも危うい稚拙な思想である。

事件が発生したのが遠い異国であるため、どうしても情報は少なくなってしまうが、大切なことは他人事として考えないことである。正確に文化や宗教を知り、お互いの考えを可能な限り尊重することこそ重要なことである。

基本は相手を尊重すること

に、爆発したバスは通学のために使っていたバスの隣のルートだった。

当時のロンドンのバスはベンツ社のものもあったと



名古屋経済大学
経済学部准教授

信哉 峯岸

今や経済の分野では国際取引が当たり前に行われているほか、2020年には東京でオリンピックもある。経済取引やスポーツ交流のため枠組みを整備することも大切であるが、いずれの分野も最終的には人と人の交流が基本である。できる限り相手を尊重し合い、交流を深めることが、オリンピックにおいても経済取引においても、我々が個人レベルでできる最善の方法であるような気がしてならない。

みねぎし しんや 金融論。ロンドン・メトロポリタン大学博士課程修了、PhD。1973年生まれ。

